



映画雑感20

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼2022年秋以降の邦画作品から。まず「ある男」は平野啓一郎の同名小説を「蜜蜂と遠雷」「愚行録」の石川慶監督が映画化。弁護士と城戸は亡くなった夫・大祐の身元調査を依頼されます。事故で亡くなった再婚相手の夫が別人の戸籍を買っていたことやそせざるを得なかった悲しい人生が浮かび上がります。しかし、最後につかんだ幸福こそが最も重要なのだという結論は心に響く結末でし

た。本年度の日本アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演男優賞、助演男優賞、助演女優賞などを総なめにした作品。印象深いのは他人の人生を借りて短くとも幸福な月日を獲得した男の姿を体現した窪田正孝の演技でした。▼「天間荘の三姉妹」は漫画家・高橋ツトムのも代表作「スカイハイ」のスピントフ作品。「天間荘の三姉妹」を北村龍平監督が実写映画化。天界と地上の間にある街・三ツ瀬で、老舗旅館「天間荘」を舞台にしたファンタジー作品。三姉妹を演じるのん、門脇麦、大島優子が好演、作品にリアリティを吹き込みました。脇を固める寺島しのぶ、永瀬正敏、柴咲コウが物語を支えました。のんが天衣無縫に映画を牽引、改めて稀有な才能を印象づけました。

▼「土を喰らう十二カ月」は水上勉の晩年の料理エッセイを下敷きに中江裕司監督が自ら脚本を手がけ映画化。沢田研二が老作家をひょうひょうと演じて秀逸。日本の里山の豊かな自然が息づいている佳品。

▼「月の満ち欠け」は直木賞を受賞した佐藤正午の同名小説を廣木隆一監督が映画化。数十年の時を超えて明らかになる許されざる恋の物語。非現実的な話だが、そうした奇跡をどこかで期待する人の琴線に触れる作品に仕上がっています。

▼「ブラックナイトパレード」は中村光の同名漫画を、福田雄一監督が実写映画化。吉沢亮が大人たちに翻弄されながら真のサンタに成長する主人公を好演。はちゃめちゃなのに

妙につじつまが合った展開は笑えます。

▼「ケイコ」は三宅唱監督が岸井ゆきのを主演に迎え、耳が聞こえない女性ボクサーの生き様を見事に映像化。寡黙で目だけを光らせる主人公を岸井がまさに生身の肉体で表現し、日本アカデミー賞の最優秀主演女優賞を獲得。作品としても本年随一の完成度でした。

▼「シャイロックの子供たち」はベストセラー作家池井戸潤原作の銀行ドラマ。とある支店を舞台に現金の紛失から始まった事件が支店全体を揺るがす事態に発展します。かっこいいヒーローが登場しない分、真実味のあるほろ苦い人間ドラマになっています。いつものながら阿部サダヲの自在な演技が画面をひききめています。